

## 松江藩の郷校について

——新史料「郷校取調巡郷日記十五」(桃文之助)を中心として——

磯 辺 武 雄

### はじめに

幕末維新时期を迎えると、各藩は時代に即応すべく藩政改革に取り組んだが、その大きな柱の一つとして、教育体制の改革をあげることができた。たとえば、松江藩でも従来の士卒教育中心の体制を改め、郷村の庶民教育振興、すなわち郷校の設立にも積極的に取り組んでいる。松江藩の郷校設立は、明治二年三月、修道館儒学校助教河合謹蔵らによる議事院への建言<sup>(1)</sup>によってその端緒がみられるが、しかし、この建言に先だち明治二年二月、新政府が「府縣施政順序」の中で「小学校ヲ設ル事」を挙げ、小学校の設立を奨励していることを考える時、藩でもすでに庶民教育のための郷校設立計画が進行中であつたことは十分に推測することができよう。もっとも「小学校ヲ設ル事」の奨励と松江藩の郷校設立計画とが、具体的にどのような関連をもっているかは明らかではないが、すでに沼津や京都等では明治二年に小学校の設置をみているし、こうした全国の庶民教育振興気運の中で、松江藩においても郷校設立が促進されていったものと思われる。

明治四年三月には、郷校設立のため南学大教授桃文之助は学校懸山本権大属と共に「追々十郡ニ郷校御取建相成候御議定ニ付右取調之為」巡郷を行っている。また、同年五月には「教導所學則」<sup>(3)</sup>が制定され、これを契機に郷校が諸郡につぎつぎと開設されるにいたつた。しかもこの教導所學則の制定によって各郡に設立される郷校は郡内の諸教導所を統率する頭取の教導所として位置づけられ、しかも、この郷校は直接に修道館の管理下におかれるという、いわば教導所―郷校―修道館という一つの組織形態がつくられたといえる。こうして明治五年に至つて、ようやくその体裁を整えたものの、学制発布を間近にして修道館は「県治一新」を理由に同年四月三十日に閉館となつた。この結果、各郡の郷校および教導所は衰微の気運にあつたといふものの、これらが近代公教育の学制受容の素地となつた点は特筆すべきことであらう。しかし、こうした各地域の郷校が近代的公教育の学校へと具体的に連続あるいは非連続してゆく実情を実証的に把握する文献資料等は非常に限られている。

そこで本稿では、新史料「郷校取調巡郷日記十五」の解題と史料全

文を紹介し、郷校の制度と実情についていくらかでも知っていただき、かつ近代公教育の学校設立状況に関する実証的調査・研究の一助になれば幸甚である。

〔一〕

本史料「郷校取調巡郷日記十五」（以下「本史料」という）の全文紹介に先だち、若干の解題を付しておきたい。

学制公布（明治五年八月）の年の一月、島根県（明治四年十一月十五日、松江県・広瀬県・母里県・隠岐を合併成立、隠岐は同年十二月更に分離し鳥取県へ合併）は、郷校取調べのため修道館教授らを派遣したが、この時の一人である南学大教授桃文之助が巡郷の様子を詳しく記録したものが「本史料」である。桃文之助は、名は好裕、字は君緯、号は節山（又は脩斎）、通称は文之助といった。天保三年（一八三二）十一月三十日に出国松江藩の侍医杉貞庵の次男として生まれ、十八才の時、松江藩の儒者桃翠庵の養子となり、のち藩校修道館の助教から教授となった。廃藩置県後も島根県に出仕して、教員伝習校（のちの島根県師範学校）の教師兼監事となるなど晩年まで教育に係り、明治八年（一八七五）十一月十三日、四十三才で没している。彼には「出雲私史十二巻」、「藩祖御事蹟」等の著書のほかに、「公私要記」、「出張日記」、「後出張日記」、「西遊日記」、「京役日記」、「第十九中学区巡回日記」等の日記類があるが、これら日記類には、通し番号が付されている。すなわち、「本史料」の表紙に「十五」とあるの

は、第十五冊めの日記であることを示している。

「本史料」によれば、巡郷者は、南学大教授桃文之助の外に、学校懸権大属小川操一郎、同懸附属森城四郎、西学少教授田代嚮平らの計四名である。また、「本史料」冒頭の「此度出郷之節心得大略」から巡郷の主な目的は、郡中すべての教導所（寺子屋、私塾）へ「教導所学則」や「女学則」等を申し渡し、同一の学則を適用させること、諸教導所の教師および門人のうち、選抜された者の学業を試業し、かつ格別出精の者については褒賞をすること、一郡一ヶ所ずつの郷校へは、その郡内諸教導所の頭取としての心得を申し付けること、郷校の経費や運営に関する郡割（すなわち明治四年十月に定められた郡中人別賦課法をさす）等については、郡役人へ十分に申し渡すこと、教導所には七才より入学のことを郡内へ布告させること等々であったことを知ることができる。

巡郷は、明治五年正月二十二日より同年二月九日までの都合十七日間にわたっているが、この間、森城四郎以外の三人はそれぞれ従僕一人を同伴させている。また、桃には出張費用として五百九拾三貫文（内訳は、日数十六日分錢五百七拾六貫文、帰着当日分錢拾七貫文）が支給されている。これは、一日分錢三拾六貫文（上下二人）の割で、その内訳は、手当錢拾貫文、旅籠代拾四貫文、昼支度七貫文、嘉魚一荷五貫文となっており、これは正権少属の旅費に相当するもので、当時の学校大教授より少助教まではすべてこれに相当させて支給したものである。

さて、「本史料」での巡郷の行程をまとめてみると以下の表のようになる。

試業日	郡名	南学教導所	西学教導所	試業場所	付記
正月二日	秋鹿	併下(西学と合)	岡本村東林寺	東林寺	松江より秋鹿へ三里、それより郷校へ半里計
廿三日	楯縫	平田町石橋屋孫八宅	併上(南学と合)元、上ヶ分村瑞雲寺)	孫八宅	岡本より平田まで四里
廿四日	出雲	三歩一村黒田龍二宅統	中洲村常勝寺	坂田村勝部本右衛門宅	平田より坂田まで一里計
廿五日	神門	塩冶村高勝寺	今市町外レ大念寺	大念寺	坂田より今市まで三里計
廿七日	飯石	未開設	多久和村寿福寺	三刀屋天神々職廣澤真玉之助宅	今市より三刀屋まで五里計
廿八日	仁多	未開設	三成町善勝寺	三成ノ郡家	三刀屋より三成まで五里半計
二月朔	大原	岡村八幡神職門脇益男宅	佐世村妙昌寺	加茂町東林寺	三成より木次まで四里計、木次より加茂まで一里半計
二日	意宇	湯町報恩寺	来海村来迎寺	報恩寺	加茂より宍道へ二里、宍道より湯町へ二里半
五日	能儀	未開設	安来町洞正院	洞正院	湯町より安来へ七里
七日	意内	波入村岡本立碩大根島宅		波入村観音寺	安来より大根島へ二里半計
八日	島根	未開設	坂本村安養寺	川津村郡家	波入より本庄へ五十丁計、本庄より川津へ二里

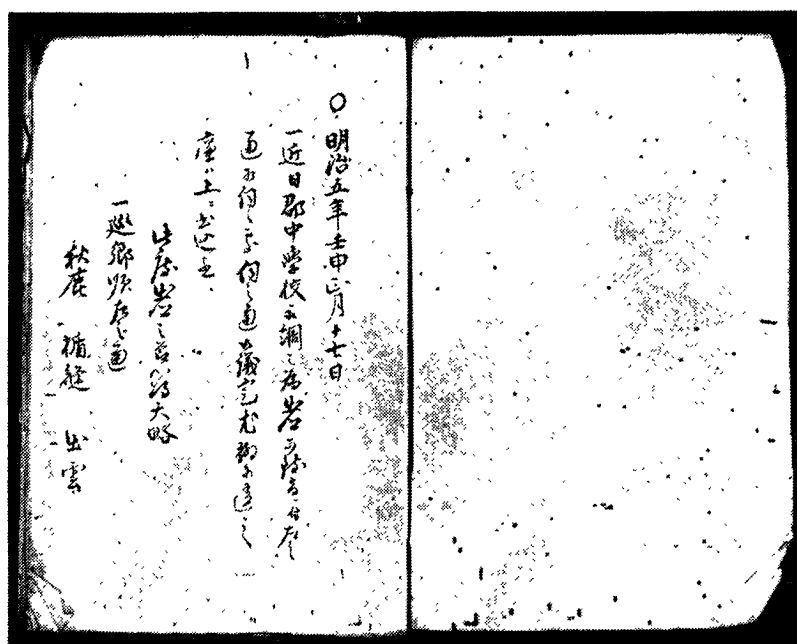
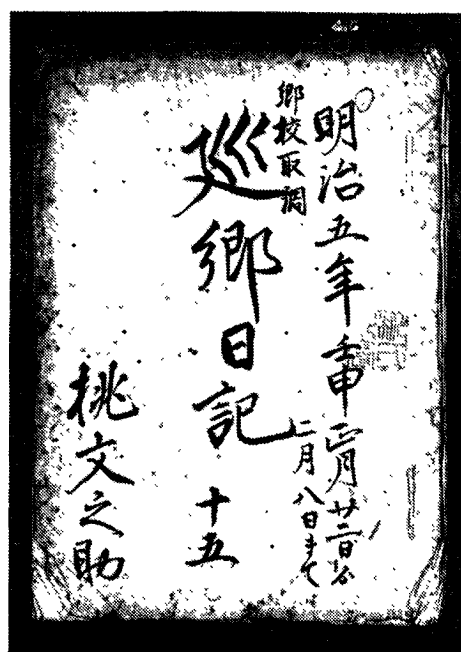
これによると、南学教導所と西学教導所はそれぞれ異なった場所に開設されている場合が多いが、秋鹿、楯縫両郡のように南学、西学が合併のものもみられる。また、西学教導所は十郡すべてに開設されているのに対して、南学教導所は未開設の郡が四郡もあり注目される。もっとも、これら未開設の郡の多くは、この巡郷を機会に開設の予定を進めていたようである。たとえば、飯石郡では、少々漢学の心得ある二人が三刀屋天神々職宅で正月廿二日より稽古を始めており、松江より教官一人を差し向けられるよう申し出ている。また、仁多郡では、近々に三成町および横田の両所に開設した旨申し出ており、島根郡では、既存の西学教導所とは別に、新たに川津に一ヶ所南学・西学の合併の教導所を開き、外に東方に本庄あるいは手角に一ヶ所、西方で生馬に一ヶ所、都合三ヶ所に開設し、川津の分を根本とし、来たる二月廿日より始めたく、教官一人を差し向けられる様申し出ている。なお、大原郡では、すでに岡村八幡神職門脇宅に開設されていたが、近來別に加茂町東林寺に南学郷校を開設した旨申し出て許されているが、教導所頭取は岡村に命じ、「加茂ノ分ハ郷校ノ分課教所之心得ニ談する積なり」と記してある。また、この機会に加茂において開講式を行うことを願ひ出ている。以上の様子から、巡郷は、各郡の郷校・教導所教育を大いに促進させたばかりでなく、郷校・教導所の増設や新開設の契機となったようである。こうして開設された教導所の数は「其前後設クル所ノ教導所ハ無慮百九十餘ナリト云フ」<sup>(4)</sup>までに至ったのである。

ところで、巡郷の様子は前述の「此度出郷之節心得大略」でおおよそのことは推測できるが、実際の状況について若干ふれると以下のようであった。先ず、桃らは、各郡の郷校および試業場所において、郡内のかねて学問に志ある面々を試業し、さらには教導所（寺子屋、私塾）の教師および生徒を試業し、それが済んだ後、郡吏および教師を呼び出し、学校取建の主意を詳しく申し聞かせ、教導所學則一冊、同表一枚、女學則一冊、同表一枚都合二冊二枚ずつを教導所教師へ渡し、また、学生には、修道館學則一冊、表一枚ならびに職制表二枚を与え、さらに教導所頭取（郷校）には御了簡の書付一通を添付したものを渡す外、県学校（修道館）で編集した「五十音」、「大統」、「地名」の三種を合本にしたものを二冊渡し、また、試業の要領については、教導所教師や一般人で学問に志ある者に対しては、「論語」や「孟子」の明講釈をさせ、成績優良の者には「学問格別致出精候段神妙之事ニ候尚厚可致勉励候」等の書付の賞を与えている。また、門人の試業に対しては、大・中庄屋および得業生数人の列席のもとで、十六才以下の者に、主として「四書五経」、「孝経」、「十八史略」等の素読、明読、講釈、明講が課されているが、中には、「職原抄」の明講や「出雲風土記」、「医範提綱」、「日本楽府」等の講釈もみられる。なお一例ではあるが、神門郡において十二才の女兒が、「女庭訓」、「女今川」、「女大学」、「論語」全部の明講をなしたのみならず、「坐作進退等迄も能調べり」として特記している。また、出雲郡においては、七才の男児に「商売往来」の暗氣を課している。なお、得業

生に対しては、漢文および和文を書き出させ、これによって銘々の力を試みたり、あるいは詩歌の題を出し、これを作らせたり、さらには五十音を規則に加えているが、これは皇漢学に必要なばかりでなく、雲州なまりを糺すためでもあるとしている。こうした巡郷地における試業において、「格別出精業之出来候者」へは、即席相当の褒賞として、最高七貫文から書付までの賞が与えられている。また、県学校への選抜学生については、県学校學則表にしたがって「一等学生」および「二等学生」といった等位が申し付けられている。

以上、本史料について簡単な解説を述べたが、以下にその史料全文を掲げる。

〔二〕 史料「郷校取調巡郷日記十五」（桃文之助）



大原 意宇 缺係

一銘、此延齡、成、家、庚、十、郡、侯、也。

出於秋者一泊生佳、試業共私

孰之而規智之成也

以何爲補遺  
戊戌冬

一、

一私塾しとくには廻まわりては不ふ日じつ取とり

方寸中萬物各得其性也見之者

大正七年三月三日

以漢書試業一校爲後尤以校之

即名家或實業家或社會或大家之

振一 加事

試業、上格、生、熟、業、之、上、下、

即序可考矣

尤た連位の北半

百足

五十二

書付、

學生郡 付原 藝文 出光

三  
月  
三  
日

但一郡之五又不過量

一和塾教所不殘錄（寄）（規）

五、一、 故其法以

江戸老舗名物一挙

明治五年壬申正月十七日

一 近日郡中學校取調之為出郷可致旨ニ付左之通相伺候處伺之通御議定  
尤聊相違之廉ハ上ニ書込置

此度出郷之節心得大略

一 巡郷順左之通

秋鹿 楯縫 出雲

神門 飯石 仁多

大原 意宇 能儀

嶋根

(頭書)

「大根嶋へハ別ニ能儀嶋根ニ渡る間ニ参りハ積」

一 銘々共巡郷之儀前廣二十郡江談し置出懸秋鹿ニ而一泊生徒之  
試業并私塾之面々江規則之儀申渡し其都合を以何日楯縫江罷  
越いと申儀秋鹿申遣し右之通にして順々相廻りハ様いたし  
度事

(頭書)

「本文之通ニハ共郡中人別呼出之都合も有之事ニ付来ル廿日ニ秋  
鹿楯縫両郡之分申遣し置秋鹿出雲楯縫神門と申如く前々郡申  
遣しハ方都合可然との事ニ相成」

一 私塾々々江相廻りハ而は不少日数相懸り可申ハ間教師各門人  
之内見込有之者丈拔萃にして召連郷校江出浮ハ様前以談置試  
業いたしハ様相成度尤郷校無之郡ハ郡家或取寄宜敷社寺或大  
家之間敷ある所ニ一宿いたし其場所江迄呼出しハ様いたし度

事

一 試業いたしハ上ハ格別出精業之出來ハ者ハ即席相當之賞を遣  
しハ様相成度尤左之通位ニ而可然事

百疋

五十疋

書付之賞

(頭書)

「本文位之賞ハ遣しハても宜敷ハ得共百疋ハ士族卒之賞ニハ間鳥目  
何實文を以可遣旨」

一 學生ハ郡々ニ申付度は丈ハ出郷先キニ於而申談可然哉之事

但一郡ニ三五人ニ不可過ハ事

(頭書)

「學生申付可然ハ得共可成丈相減し二人を高とすハき由」

一 私塾教師ハ不殘銘々共宿迄呼出し規則相渡しハ様いたし度尤  
此儀ハ前以郡役人江迄申遣し置ハ様いたし度事

但もし其節差障等有之ハ罷出面々ハ銘々共婦郷之日限見計

何月上旬或下旬学校江罷越ハ様談置度事

(頭書)

「私塾教師も出席之者ハ試業いたし其日出席不致ハ得者規則を郡吏  
ハ渡し置郡吏ハ當人ハ江渡させハ手筈」

一 一郡一ヶ所ツハ之郷校ハ其郡内私塾頭取之心得を以懸引いた  
しハ様申付度事

但本文之通相成居不申ハ而ハ規則之儀等彼是ニ付不都合之

儀出來可申哉と被存い事

一郡割等諸事之始末ハ此度出郷之節郡役人江志かと及懸合大抵規則相立歸りい様いたし度事

一郷校引受之面々度々申出い儀も有之い間郷校江郡役人時々出席いたし諸事肝煎りい様申談置度事

一七歳ハ入学之儀ハ此度出松之節郡役人江申談郡内江布告為致い様可致哉之事

一教導所并女学揭示之学則ハ郡中ニ而も揭示可致訳ニ被存い處此方ハ可相渡哉不残渡しい様相成い而ハ不少事ニ候間一郡一ヶ所之是迄之郷校之分丈相渡し其餘ハ右郷校ハ為渡い様いたしい而ハ如何哉之事

(頭書)

「教導所学則同表女学則同表合して二冊二枚ツ、いづれ江も相渡し郷校江ハ別ニ松江之学則一冊同表一枚職制表一枚学生江之御了間之数を記しい者一枚を渡し置揭示之分は彼方銘々ニ為認い都合」

一郷校之懸札いたし度申出い郡も有之い處右ハ不苦筋之様被存い如何哉左い得者教導所之三字板札ニいたし可然被存い處是亦此方ハ渡しい而ハ彼是世話も有之い間あの方ニ而作らせ可然哉之事

一此度巡郷ハ学校懸ニ而権大属小川操一郎附属森城四郎南学ニ而拙者西学ニ而少教授田代喬平合四人来ル廿二日ハ廿日之間之御議定ニ相成

十九日

一学校懸山科権少参事ハ只今懸廳江可罷出旨申来罷出候處此度巡郷ハ廿日之間之筈ニい處近々新参事も来着之越何卒急ニ致巡郷い様相成度左いハ五郡ツ、手分ヶいたし東西江分レ出懸都合十日ニ相済い様いたし可申旨依而段々考量いたしい處當時不快引籠之者も多く殊ニ東西ニ分レい而ハ自然東西齟齬之儀とも出来不致とも難申何卒成丈急き相廻り一組ニ而相仕舞い様相成度再應申出い處伺之通ニ而宜數旨被申聞来ル廿二日ハ来月九日迄都合十七日ニ相廻りい様御議定相成

廿一日

一森城四郎来ル出郷入費相渡りい由ニ而持参いたし呉い事如左

一錢五百七拾六貫文 日数十六日分

一錢拾七貫文 帰着當日分

メ五百九拾三貫文

右ハ学校教官ハ假官等ニ而等不相定事ニ付大教授ハ少助教迄都而少属之場を以被相渡い御議定尤此儀ニハ聊議論も有之候ハ共先これにて相渡置との事之由正権少属旅費如左

一錢三拾六貫文 上下式人

但一泊分昼所共

此譯

拾貫文 手當錢

拾四貫文 旅籠代



七貫文 昼支度

五貫文 嘉魚一荷

廿二日朝少々雨後晴

一今日発程ニ付縣廳江届之儀ハ学校懸附属江托し置尚又南学官員中并北学西学剣術所之教授中江も及為知如左

十郡学校取調として今正月廿二日致出郷い

一朝六時発程之約束ニ而小川権大属方江集る同人宅ニ而酒を供し一同三五盃ツ、相傾醉ニ乗して五<sup>半</sup>時頃小川田代拙者三人ハ馬ニ而発ス馬ハ被相渡拙者ハ浮船と号する馬也小川之若黨ハ鳥越賢一拙者ハ中川三郎田代ハ足立小次郎森は無僕都合七人荷物ハ銘々挾箱一荷ツ、外ニ森御用物挾箱一荷ありて都合四荷也

(頭書)

「人足賃一里ニ付三百貳拾八文之由」

馬上ニ而詩歌如左

乗酔揮鞭醉未醒凝眸四馬幾回停鼻遊鷗戲初春水殘雪連山白半青

な可めよし日影うるへし馬はやしあ可ぬふしなき門出なる哉

かくて四時頃秋鹿之郡家江着須出役須田頼藏大庄屋田村弥三右衛門

中庄屋原田柳五郎引野三郎兵衛西学得業生清水順民来ル晝支度ハ郷校ニ手配置い由申出いニ付直ニ発して郷校ニ至る郷校ハ岡本村東林

寺ニ而南学西学合併なり

寺ニ而南学西学合併なり

松江ハ秋鹿江三里それハ郷校江半里計

郷校ニ而午飯を喫し終而當郡内兼而学問ニ志ある面々を試檢し又私

塾之教師及生徒を試檢須右済而郡吏及教師を呼出し学校取建之御主

意を詳ニ申聞せ教導所學則一冊同表一枚女學則一枚同表一枚都合二

冊二枚ツ、を私塾教師江渡し右之外ニ修道館ノ學則一冊同表一枚并

職制表二枚學生江遣ス御了簡之書付一通を添て教導所頭取<sup>是迄之</sup>之者

江も可渡置答なれとも東東林寺ハ西学之方のみ相開ケ南学之方ハい

また相開ケ須いニ付右開ケい得者相渡し可申旨を以郡吏江相渡し置

外ニ此度修道館ニ而御出来之五十音大統地名<sup>三品</sup>二冊も教導所頭取

江渡し置此規則談しハ小川ハ取計之談方都而十郡同様ニ付以下詳ニ

録せ須尚巨細之事ハ出郷前伺条々之通ニ付略之右規則談じ之儀相済而

又郡吏をも出席左之通小川ハ申渡之<sup>以下とも實ハ皆小川申渡之</sup>

<sup>見壽儀論孟講尺いた須</sup>

佐陀本郷村医師

中島 見壽

右本職ニ懸添学問格別致出精い段神妙之事ニハ尚厚可致勉勵

い

壬申正月廿二日

學校

典意義論語  
明講尺いたす

古曾志村医師

幡 典意

右同前

(頭書)

「元来南学西学ハ内場之分課にて一學校たるの御規則ニ付外郡ニ而南学分課之教官なき所ハ都而西学引受之教官江まで相渡し置」

一試檢之内ニ一咲之談あり一寺之僧あり私塾之師ニ而始ニ一見したる

時ハ随分有徳之僧之體ニ見えたれハ如何や<sup>する</sup>せんと考へ居たりしニ豈

ニ料らん何も心得たる事なく今日之御試験ニ讀むべき書もなき由郡吏を以申出てしニより乍去手習ニ而もさせ一塾を開きたる程なれハ何も讀めぬとの断ハ立不申旨申答ハ處庭訓往来位より外存し不申由ニ付さらハ其庭訓往来ニ而も宜敷承り度と申聞ハ處則庭訓を持出せしが如何にしても庭訓にてハと思ひし趣ニ而鳥渡御免と申而勝手江退き三體詩を持来り詩を一首杜牧ヲと申哉否ヤ千里鶯啼ノ一首を高らかに吟したるありさまハ如何にもをかしかりかれとも咲ハれもせ須口を掩而席の終るを待たりけり

一今日秋鹿一宿之筈ニ而あれとも発程之節山科権少参事ヲ被申聞ハ詠も有之ニ付船を命して直ニ楯縫ニ向ふ時ニ夕七半時頃也

岡本ハ平田迄四里傳渡二人水夫ニ而松貨十一ノ式百文

船中ニ而歌詩各一首を賦須

何厭餘寒凜逼躬布帆一片掛東風炮波雪嶺春初景未飽回看日已空  
山  
水清し水の面廣し舟早し心のとけき初春のそら

一夜五時頃楯縫郡平田町江着郡家ニ宿須出役安食弥平次南学少得業生長崎堅造石橋屋孫ハ西学少得業生関春和中庄屋木佐愛右衛門来リ既にして大原郡南学中得業生黒田龍二来ル

一此度出郷入費として相渡りハ錢森城四郎江相渡し置小川田代も相渡し會計ハ悉皆城四郎相引受帰着之上教等用ハ約束

廿三日陰不雨風寒し

一郷校江罷越ス郷校ハ石橋屋孫八宅也これハもと南学之郷校ニ而西学ハ上ヶ分村瑞雲寺なりしを近来ここに合併せる由

一雨森精齋翁ハ海苔を贈らる依而此方ハ菓子を贈る鳥渡相見舞ハ心得なりしニ大ニ不手廻しニ相成ハ付不罷出雨森翁ハ近来平田住居也一午饭を喫して後八前頃ハ大庄屋木佐得三郎中庄屋木佐愛右衛門長廻義一郎得業生三人出席試験を始む以下とも大中庄屋及得業生席ニ列する事皆同様なり終而規則を談する事秋鹿ニ同じ且左之通

四書五經

五貫文

林木村源左衛門梓園山尚市

十六才

右学問格別致出精ハ段神妙之事ニ付為其賞遣之尚厚可致勉勵ハ

四書明讀

三貫文

平田町醫師春和梓関盛藏

十三才

同断

三貫文

同町善兵衛梓大谷

豐之助十三才

右いつれも同文

(頭書)

「松江ノ是迄之例ニ倣而四書明讀ハ十三才にて五經明讀ハ十五才までニ而賞を遣ス然るニ此分十六才なるを調違なり且又素讀之分ハ素讀出精を認むべきをこれも調違也」外ニ医生二人を賞し西学ノ学生一人を命ス学生ハ南学ハ拙者ハ西学ハ田代ハ申渡ス議定ニいた須扱又得業生立拙者ハ頭書ニして口上ニ而申談する事如此

一方今学問之心得得業生ハ不及申其餘にも志あるものハ各通にして可書出漢文和文心ニ任すへしこれハ銘々之力を試みん可為なり

一官員及生徒之出席簿を設ケ置隔月ニ学校ハ出すへし

一南学西学ハ全く一学校之内ノ分課なれば諸事相互ニ示合同力戮心

力たるへし

一此度五十音ハ規則ニ被加ひハ皇漢字ニ必用なる事ハ固より論なし且雲州ハなまり辞多けれハ先ツこれを以よく糺すへし

一詩歌之題を出し作らしむる事如左

歌題 春風春水一時来

詩題 早春遊望

右之条々を談する事以下皆同様なり

一右試檢終りしハ暮六時頃なりけるかそれハ石橋屋弥八ハ心配にて酒肴を供須尚晩飯をも差出須へしと申せしかとも辞して発ス時ニ六半時頃なり郡吏得業生などの心配にて三人とも馬ニ乗て発し出雲郡坂田村勝部本右衛門方江着須

平田ハ坂田迄一里計

此時本右衛門悴豊太郎西学大得業生飯塚文庵及黒田龍二途中まで迎ニ出ル着後大庄屋江角柳四郎中庄屋勝部繁左衛門本右衛門弟善四郎儀挨拶ニ出る本右衛門ハ松江江参り留守なる由途中ニ而詩一首を賦須

暮雲淡々出雲川春浅風寒馬不前借問今夜何處宿隔林一带起炊炮

廿四日半晴半陰

一南学ノ郷校ハ三步一村龍二宅續西学ハ中洲村ノ常徳寺也常徳寺ハ本右衛門宅ハ三十丁計なり南学之郷校ハ隣村にして至而近しいつれも手狭なる由ニ付本右衛門宅ニ而致試檢ハ積ニいた須

一朝薄茶を出し暫ありて別室ニ於而煎茶を差出度申ひニ付参りハ處少

し離れて池ニ臨みたる水亭なり善四郎手前を以群鳥（朝日）といふ煎茶を供

一平田ノ西学得業生并昨日命したる学生兩人来り三人江として菓子一箱持参

一晝前頃ハ試檢を始むる如例大中庄屋柳四郎繁左衛門及中庄屋勝部甚七も出席ハ前頃迄ニ素讀相濟而午飯を喫しハ八半時頃ハ講尺を始め暮六前頃済それハ規則を談する事如例終而如左

（頭書）

「詩歌之題楯縫同様これを命ス」

五經

三貫文

神門郡見久村寛三郎（仲）勝部陸市（十四才）

右幼年之處素讀格別致出精ハ段神妙之事ニ付為其賞遣之尚厚可勉勵ハ

四書

三貫文

坂田村本右衛門二男勝部本次郎（十一才）

同

同

黒目村喜見寺鐔道弟子僧慈恭（十三才）

商賈往来  
暗記

貳貫文

荒木和（市）私塾金樂男門人（七才）

四書五經素讀  
終而孟子講尺

五貫文

坂田村本右衛門（仲）勝部豊太郎（十六才）

右幼年ニハ處学問格別以下同文

同前

五ノ文

中原村医師亮庭仲  
黒目亀

市十五才

同前

同

多久良

造十五才

右兩人とも同文

右終而拙者ゝ左之通申渡ス

中原村甚七伴

勝部

又一郎

右二等学生申付け事

壬申正月廿四日

南學

學頭村元神職

勝間

芳丸

右三等学生以下同文

西学ニ而二等学二人賞六人

右何も終れるハ六半時頃也

一何も終而酒及晩飯を出しそれを馬上ニ而発し神門郡今市町廣戸屋甚

左衛門方江着す四半時頃なり途中まで西学得業生迎ニ出る

坂田々今市迄三里計

一松江学校引受ゝ飛脚来ル宿状も来ル

(頭書)

「森城四郎儀是迄三等附屬なりしか二等附屬ニ被命」

廿五日晴

一住江武右衛門来ル学校□中教ニ而大原郡引受なれとも此迄神門郡引

受なりし故此度拙者とも巡郷ニ付先達而頃當郡江参り居當郡之試験

終而大原郡江参りい筈なり出役杉尾大四郎大庄屋直良為右衛門外ニ

中庄屋兩三人来ル中庄屋六人あり高橋佐十郎中山達兵衛遠藤太兵衛中尾順七郎石橋只市藤間

谷左衛門といふ得業生等も数人来ル

一四半時頃々今市町外レなる大念寺ニ赴く大念寺ハ医学所なり南学之

郷校ハ塩治ノ高勝寺なれとも手狭なるニよりてこゝにて試験之積

一當郡ニ而大得業生神田藏太郎中得業生金本真澄森山白十郎松田小太

郎都合四人西学ニ而ハ續紙周泉儀少助教心得也外ニ得業生三人あり

一午飯終而試験を始南西両学ノ郷校生徒及私塾ノ生徒を合して百七十

七人いづれも随分学問之道開ケ他郡ニ秀る事遠し皆伊藤宜堂か餘澤

なりと見えたり中にも別而目立たるハ左ニ挙くる所ノ女子ニ而只書

籍を慥ニ讀みたるのみなら須坐作進退等迄も能調ヘり然るをこれニ

付感情を發せしハ今日ハ松江ニ而女学校御開ニ而拙者も右之開キを

仕舞而出郷之筈なりしに段々御急ぎ之訳有之廿二日々出郷せしか拙

者か娘も當年十一才ニ而今日入門之積なりしが如何せしやらと思ひ

出し情ニ堪えざりき親之心ハ甚愚なるもの也これを以ても考へ見よ

子を持而知る親之恩とハよくいひたるものなり此心合を以て親之恩

を考ふれば無極之徳ノ片端をもおもひやられたり

一試験中をかき事あり一人之僧私塾之教師なりけるか秋鹿の僧に同

しく何も覺悟なきよし申出いニ付何にてもよろしき旨答ひ處然らハ

詩一首をといふや否や雲敷山敷云々之山陽之詩を讀ミ出せり其趣秋

鹿之僧に同し扱ハ一寺之住持たる者かゝる事にても済むと見えたり

成程これを以ても佛道之衰ひたる事想ふへし

(頭書)

「歌詩之題楯縫出雲ニ同し尤神門ニハ詩を善くする□まゝ有之ハニ付早春遊  
望杜審言之次韵を命ス」

一試檢終而左之通申渡ス

職原抄論語十八史略明講  
四書五經明讀

同断

孝經明講  
四書五經明讀

七貫文ツ、

同

論語講尺  
四書五經明讀

右いづれも出雲郡勝部豊太郎同文

孝經明講  
四書五經明讀

同

五貫文ツ、

同

同

塩治村長十郎倅  
実道 啓次郎 十六才

馬木村元神職正雄弟  
花田 鹿之助 十六才

杵築町百兵衛倅  
藤岡 源之助 十五才

知井宮本郷精右衛門弟  
梶谷 貞之助 十四才

今市町医師天臣倅  
松之舎 光太郎 十二才

塩治村医師元龍倅  
松本 賢助 十五才

古志村正法寺弟子  
釈 秀我 十四才

下庄村熊市倅  
武田 門太郎 十六才

里方村医師見寿倅  
板木 千市 十六才

右いづれも同文

女庭訓女今川女大学  
論語全部明講

五ノ文

今市町正三郎娘  
勝部 きた 十二才  
私塾正三郎門人

右出雲郡勝部陸市同文

右之外西学ニ而二等学生一人賞五人

一右何も相済而旅宿ニ帰るハ夜五半時頃也それヲ追々郡吏得業生等挨  
拶として来り出雲郡得業生も来ル且梶谷精右衛門羊羹を携而来ル精  
右衛門を知井宮本郷ニ而先年出陣之節宿りしもの也

廿六日朝少々雪後晴

一朝五半時頃三人とも馬上にて今市を発し四半時過飯石郡三刀屋町江  
着

今市より三刀屋迄五里計

一三人とも一旦中原屋甚左衛門方江着須れとも手挾ニ付小川ハ森城四  
郎を携而隣家南京屋幾右衛門方江罷越ス

一中庄屋永井萬四郎松尾栄三郎来ル大庄屋原傳九郎儀ハ用向有之今日  
来らざる由断ル西学中得業生常松謙齋井上橋水及南学ニ而命し置た  
る當分世話役廣澤菅田来ル

一當所ハ画家横山雲南か出所ニ而書画を所持せる由ニ付井上橋水か世  
話ニ而數十幅を取寄せ一覽須随分旅中ニ而之一快事なり

一當郡ニ而医学所ハ多久和村寿福寺を用ゐたる由南学之教導所ハいま  
た開ケ須當分廣澤菅田宅ニ而世話いたし居い得共同人儀も学力格別  
無之中庄屋栄三郎倅柳藏并物書中西鞍藏この兩人少々漢学出来いニ

付兩人世話ニ而當町天神々職廣澤眞玉之助宅ニ而去ル廿ニ而去ル廿  
二日ハ稽古相始ハ由依而明日同所ニ於而試験之積尤松江ハ教官老人  
差向ケ呉ハ様申出ハ付其段松江江以飛脚申遣ス

(頭書)

「婦郷之上廣澤管内ハ免ス」

廿七日晴

一朝五半時過廣澤眞玉之助宅江罷越試験致す萬々如例終而左之通申付

三刀屋町榮三郎梓

松尾柳藏

同

中西鞍藏

西学ニ而賞二人

(頭書)

「詩歌題とも

春寒花較遅

右之通にして作らしむ」

一右何も相濟むハ九時過なり一旦旅宿江帰り八半時頃ハ三刀屋を發三  
人とも宿駕籠ニ乗る尤木次までハ步行ニ而木次之町を離れてより駕  
籠ニ須大原仁多之郡界なる樋谷といふハ兼而承り居れとも此度初而  
通りけるか如何にも幽谷なり谷川を左右江渡りて都合二十橋計もあ  
るよしなり此邊ハ追々雪深く一二尺ハ三四尺ニ及ふ詩及ひ歌を咏す  
る如左

衝天相對白嶢嶮中着一條流水声行到火溪途忽暗人家何處借松明

仁多郡なる樋谷にてこゝハ素盞鳴尊の鳥髮山にて大蛇をきり給

ひし時その血火になりて流れけるより谷の名ともなれるよし里  
人のいへるを聞て

火ニなりし昔やいつらひの谷の雪消の水の音高きか那

一夜四時頃仁多郡三成之郡家ニ着須此地寒甚し

三刀屋ハ三成まで五里半計

廿八日雪ふる午後晴

一朝大庄屋中林嘉一兵衛来ル中庄屋兩人来ル中庄屋ハ岩田善左衛門糸  
原作兵衛岩田榮十郎也□□ハ誰々といふ事不詳西学中得業生石原  
仁齋千原秀齋来ル

一歌二首を作る

峯々ハ雪気なからニ霞みつゝみ山の里も春ハ来にけり

山里ハまた雪深き軒端にも春を志らす鶯の聲

一西学之教導所ハ三成町善勝寺を用ゐたる由南学ハいまた不相開近々  
ニ當町及横田両所ニ相開き度由申出る依而此度ハ郡家ニ而試験之積

ニいた須

一八時過ハ試験を始め萬々例之如にして暮六時頃相濟左之通申渡ス

四書五經明讀

孟子一三卷明讀

医範提綱

醫師秀齋梓

五ノ文

千原春甫

十五才

右幼年ニハ處儒学并医学格別致出精以下例文

外ニ西学ノ賞一人

(頭書)

「詩歌題飯石と同様にして作らしむ」

一右試檢中ニ詩一首を賦須

廿九日晴

光陰卅歲夢勿々学淺曾無分寸功且喜文風及偏境山村亦有讀書童

一試檢之為呼出し置い内兩人昨日夜ニ入り参りい者兩人有之如何可致

哉之旨大庄屋嘉一兵衛が申出いニ付今朝致試檢終而歩行ニ而發ス五

半時頃也八時頃大原郡木次町ニ至而午飯を喫須中鍛冶屋由右衛門と

いふ同町小西猪三郎来松江学校江修行ニ出懸居い者也

三成る木次迄四里計

一三半時木次を發し加茂町竹内幾左衛門方江着七半時頃也

木次る加茂迄一里半計

一□役日野元助中庄屋渡野顯十郎西学ノ中得業生錦織道斎南学少得業

生三原愛三郎等来ル又住江武右衛門及意宇郡西学ノ中得業生大坪行

藏来ル

一當郡南学ノ郷校ハ岡村八幡神職門脇盈男の宅ニ而西学ハ佐世村妙昌

寺を用ゆ然るを近来別ニ加茂町東林寺ニ於而南学の郷校を開き度由

申出願之通被差免尤教導所之頭取ハ初発る岡村ニ開き居い事故岡村

之方江申付加茂ノ分ハ郷校ノ分課教所之心得ニ談する積なり加茂ノ

郷校ハ青砥立順也東林專滉雲田中泰六等力を合せて入費等之世話い

たし由依而當郡之試檢ハ明日右東林寺ニ於而致し積申談置

一大原町ニ而私塾を開き居る祥雲寺賢賢と申者明日ハ法用ニ而難罷

出由を今晚来ル依而今晚致試檢い積ニ而呼出し得共何も覚悟無之

只往来物位る外承知不致申出いニ付何分夜中之儀にも有之先ツ其俶

相返ス

二月朔日時

一松江ノ飛脚到来住江武右衛門儀飯石郡教導所引受相兼大原相仕舞直

ニ飯石江相廻り可申旨申来由申届

一大庄屋土屋半十郎中庄屋木村小右衛門来ル

一今日惣方相なかめい内歌一首を咏須

きさらきの景色となりぬ大原野木の芽もはる能風そよきつゝ

一四時頃る東林寺江罷出及試檢萬々如例詩歌を命須る如左

歌題

一七時頃試檢相済左之通申渡之

四書五經明讀  
且論語講尺

五貫文

木村 義三郎  
十五才

同

同

陶山 仁一  
十六才

右いつれも出雲郡勝部豊太郎ニ同し

四書五經明讀  
且儒書医書講尺

五貫文

小田 忠恕

右幼年之處医学致出精傍儒学をも心懸い段神妙之事以下例

文

右ニ同し

五貫文

野々村 健二  
十五才

右仁多郡千原春甫同文

学庸論語  
明讀

式貫文

三原 和三郎  
十八才

同

同

景山 与六  
七才

右出雲郡勝部陸市同文

木次町嘉一右衛門<sup>半</sup>  
小西伊三郎

右一等学生申付

加茂社元神職  
伊古美葵

右二等学生申付

右是迄加茂郷校ニ而伊古美葵古瀬行助池田元和加藤謙斎竹内藏之助成相富太郎六人ニ而句讀之世話いたし居由ニ付其内伊古美一人学生ニ命し其餘五人江ハ素讀致手傳ハ様武右衛門ノ申付可申旨談し置外ニ西学ニ而学生式人賞三人あり

一加茂ニ而も開講之式いたし呉ハ様願出ハニ付武右衛門江申談し拙者ども退きハ跡に而講尺いたさせ置

二日曇天午後少々雨

一四時頃三人とも馬上にて加茂を發ス意宇郡安道町大坪行藏方江着する晝九前時也

加茂ノ安道江二里

一行藏儀ハ意宇郡之郷校江罷出彼是之手配いたし由ニ付隠居清信儀亭主振いたし一盃を傾ケ午飯を喫し終而又大坪氏心配にて馬を出し又三人とも馬上にて發ス少々雨ふり既にして休此度出郷ハ誠ニ天氣間合よろしく途中ニ而雨ニ逢ひしハ初而也七時頃湯町之郷校報恩寺江着

安道ノ湯町江二里半

一報恩寺ハ南学之教導所なり西学之教導所ハ来海村来迎寺といふを用て往来之路傍ニあり此度之試験ハ湯町ニ而いたしハ積なり

一安道ノ出せし三匹之馬之内小川の乗れるハ昨年松江閑厩ノ御拂ニナリハ糸鹿といふ馬なり當時安道町小綿久右衛門の所持なるか上り下り之時癖あるよし申出ハ得共小川ハ昨年まで軍務ノ在職ニて此馬ハ手心ありて恐るべき事なしとて乗れるに報恩寺ニ着せる迄ハ無事なれとも既に着して門内ニ於而馬ノ下りしや否やはね出しはみをきりて庭中をかけめぐり遂ニ鹿島ノ小祠ありけるを蹠して覆せり其節之挙揺一方なら須されとも遂ニ門外江ハ出てず人ニハ傷害もなし誠ニ幸なり

一意宇郡郷校引受少助教山本久之丞中得業生大坪行藏大庄屋松浦正治中庄屋永原市衛松浦武三引野惣市挨拶ニ出る既にして當寺住持も出る扱今日ハ追々晩景ニ及ひ所詮試験ハ業ニ懸り不申ハニ付明日ニいたし度乍去遠方ノ出浮居ハ者可有之夫等之面々ハ不都合も可有之ハ間今日は右遠方之者丈相仕舞其餘ハ明朝との約束にして惣駄之三分ノ一計試験いたし終而六半時頃報恩寺を發し福庭定四郎方江参り宿須

一先達而神祇少輔門脇重綾儀杵築江参り千家北島両家を始それノ身分之儀被命千家も華族ニ被列父子とも從五位ニ被叙忤尊福ハ少宮司出仕ニ被任ハ由則尊福宿称ノ書状を被贈ハ由ニ而郡吏ノ相届過日松江縣江被呼出則此間當所通行被帰ハ節被認置ハ由也

三日朝陰午後晴



一四時頃、郷校ニ於て試檢いたし、萬々如例詩歌題を命ずる事如左

湖上春望 詩歌共

一試檢終而左之通申渡ス

四書五經明讀

湯町三郎右衛門  
福庭 賢太郎  
十六才

右素讀格別致出精、段神妙之事ニ依而賞之尚厚云々

二等学生

醫師端鑑  
福間 寛平

三等学生

総右衛門弟  
松浦 平市

外ニ西学ニ而学生、老人賞式人

一湯町福庭定四郎ハ則是、面白と称せしものニ、而其座敷眺望其宜敷嶽羽倉、北山并松江城下、意宇湖など、都而境内江取り入れた有様に、如何にも美景なり、けれハ詩一首を賦ス

風柔雲静夕陽殷、露色平、涵卅六灣鳥、逐去帆飛漸遠、人投芳餌、意猶閑、亀城倒映、飢湖水、君岳斜連、浮浪山、逞勝争奇、多少景收来、皆在寸眸間

一意宇郡之試檢、相仕舞、得者湯町、松ニ乘り、能儀郡安来江、迄参り、ハ積ニ而、船を命し、置左れとも、試檢済之、刻限も計り難きを、以ていつ頃と申事ハ、命し置さりけるに、案外ニ早く九半時頃ニ相済、ハ付、松ハ如何哉と相尋、ハ處いつニ而も宜敷由申出依、而直ニ出し、ハ様命し、ハ處福庭氏、ハ酒を供し、終而七時過頃、船を発ス、又同氏、ハ心配を以て、松中江夜食且酒肴を携へ、右取扱之、為一人を乗らし、む七半時過、松江大橋邊ニ至る用向あるを、以て田代嚮平宅江、迄同人家来、小次郎を上らし、む然れとも、銘

々とも家ニ歸ら須して、始終松中ニ居而、禹之門を過て入らざるにも、たとふへきかなと、申ハ内詩一首を賦ス

未終公事可如何、自一辞家日、已多萬瓦都城斜照、〇儼舟猶作旅人過

一松頭、ハこゝにてハ舟目代之方江届いたし、ハ作法ニハ間島渡上り可申とて、上りハ處餘程相待、ハ共歸り来ら須如何哉と申居、ハ内歸り来て申ハ、當所ハ松継立場ニハ間乗り替、異ハ様との事也、然處只今乗替てハ萬々甚不都合なるのみ、なら須左様之作法ある事ハ、是迄曾而承りハ事も無之、何分いつれなりとも一人来れと申遣し呼寄せて色々及談判、ハ得共始末附不申、其方ニ而事之次第分り不申、ハ間松目代を呼へと申ハ、處や々ありて、松目代六右衛門といふもの来り過刻ハ、恐入ハ儀申上ハ、此儼御通行ニ而何之差障ハ無御座と相断ルニ付、直ニ船を出須時ニ暮六時頃也、右之通申出たるハ、商ノ手前ニ而訳ある事と見ゆれとも、委細分明なら、須他日聞糺し置たきものなり、それより追々川下江出て、より酒を始め、福庭、ハ持出し肴之内、耐味噌を、支度したりければ、白魚を求て肴とし、彼是ニ而醉を、尽し持出し之握飯を喫して、少しく眠りたる内ハ、や安来ニ着、松なりとて起されたりけるに、既に四半時過なり

湯町、ハ安来江七里、渡海松ニ而式拾八貫文一里四貫文之由

一安来松場まで町役人并宿亭主等迎ニ出居不審ニ存し、尋ハ處今夕、松ニ而出立せし事、意宇郡々吏、ハ申越したる由也、それハ宿ニ就ハ得者、當郡西学ノ少助教心得、原徹藏来ル、それより浴して又酒を出し、飯を供し、彼是談話して、八半時頃寝ニ就く宿ハ山本屋新八といふ是、近江戸往来なとの定宿ニて拙者も度々宿りし家なり

四日陰不雨

一朝起て歌一首を賦ス

朝戸あけて出る須なへちかをる也いつこのもり能梅か咲けん

一大庄屋天野又三郎中庄屋吉岡甚右衛門金藤友重西学ノ少得業生杉原秀貞等追々ニ来ル原徹藏も度々来ル且住江周衛来ル周兵衛ハ武右衛門叔父ニ而昨年が當地ニ住居ス

一意宇郡之試験ハ昨日中ニ相済み今日中ニ當所へ廻ル様可相成心組ニ而左いへハ今日ハ能儀郡之試験いたしひ訳ニハ参り申間敷明五日試験之積申遣し置いニ付昨晩到着して今日之試験出来い都合ニなりたれとも何分前ニ申遣し置いハ明日之積ニ而俄ニ郡中之者呼寄せい事もなりかたく今日ハ遂ニむだニ一日を送りい様相成依而午後亭主新八を召連れ少々散歩ス時ニ安米之元御茶聲ニ至りて見い處誠ニ以前之姿もなき事ニ相成懷旧之感ニ堪え須詩一首を賦ス

無人空殿聳連覺牆圯園荒枯木横唯有青松儼成列東風吹起玉琴声

一住江周兵衛が菓子一重を贈り永井与左衛門が酒一陶を贈る

一當郡西学ノ教導所ハ當町洞正院を用い南学之教導所はいまた開ケさるによりて洞正院ニ於而試験いたしひ積ニ談し置

五日晴夜少しく雨ふる

一朝兩得業生及び神職喜多□胤来ル又柏木某来ル名云之杉ノ門人太か父なり菓子一箱を贈ル

一四時頃が洞正院江罷越し試験いた須萬々如例□歌ノ題ハ意宇ニ同し終而如左七半時頃済

一三八

四書五經明讀  
出雲風土記講尺

四書五經明讀  
日本樂府講尺

安米町神職□鷹俣  
野口美登理  
十六才

同人二男

同 連 次 郎  
十三才

右意宇郡福庭賢太郎ニ同し但格別ノ二字ヲ除ク

(頭書)

「詩題

雨霽春色粲然

歌題

春情在鶯」

一當時ニハ尚一宿いたし明日大根嶋へ渡る積ニてあれとも都合よく相成いニ付暮六時過が松を発ハ松中ニて詩一首を賦ス

日沈何恨去舟遅乗月消搖亦自奇海水望迷疑在夢沙禽声近似呼詩十

神山下揚帆處二子村邊繫纜時夜色朦朧籠雨氣洲林渚樹淡難知

一大根島之都合詳ならざるに依て二子村なる中庄屋安部延四郎方江罷越ス時ニ夜四時頃也

安米が大根島へ二里半計伝説松ニて或人水夫一人ニ付米巻升五合つゝの積合して四貫五拾文也

六日雨ふり四時頃より雨休ミ薄曇ニて暖甚シ

一江島ノ小庄屋善一來ル當所ニ大子と称し生れしより二三歳ノ童子の如く當年八歳なる者あり御覽じ給ハルやと申せしニ依て連れ来らしむ直市といふものゝ悴ニ而与松といふ長ケ四尺八寸三分半髪にして手足太く口鬚あり陰毛大分生し万事十六七歳之男子之如し奇なりと

一詩一首を賦ス左ノ如シ

自一辭家欲二旬來逢異服異言人松江在近却如遠細雨濛々孤島春

余ハ此島へ始めて渡りしか島の事なれハ言語衣服も自然ニ一體をなせり食料ハ琉球芋のみにて米ハ年始節供氏神祭或ハ病氣之時ならてハ食せざるよし此島周回一里餘にして山なく水田稀なれハなりと聞ゆ此島ハ意宇郡ニ属須れとも隔たりたる地ゆへ別ニ学校一ヶ所取立度申出ゆニよりて是迄波入村之医師岡本立碩ニ當分世話役を命し置たり依而立碩宅ニ於て句讀どもを授け居たりしが右宅ハ手狭ニ付同じ波入村なる観音寺にて試験を受け積依て宿ハ右寺之境内眺望よろしき一亭あれハ其亭へ手配置ゆ由延四郎が申出乍去今日ハ萬々不都合之事あるニ依て明日試験之積也

一八時頃を二子村を發して波入村觀音寺に至る

二子村に波入村迄十五六丁計

觀音寺之本堂が廊下を傳へりて行くニ平遠亭といふ亭あり伯耆大山之僧塔然こゝに遊びし事ありと見えて書画種々ある内ニ平遠亭々号之額及び記文あり海水を見渡し能儀意字二郡を望ミ眼下ニ經島つゞき島などを見下し隨分美景なり遠眼鏡を出しこゝかしことなかも居りし内ニ岡本立碩來ル立碩ハ始めて逢ひけるによりて是迄修行之模様を相尋ひ處是迄させる修學もなき由年齡六十餘にして七十歳ニ近し若き時紙屋町ノ天野文庵方□入塾して医を學び儒書ハ山本安良ニ學ひし由さらは余か實父を知りし哉實父ハ杉貞庵と号して則文庵の門

人なりと問へハ杉様ハ則相弟子にて自分入塾ニ御養子ニ被為入ゆ  
也と答ふさらは父之執ナリ豈ニ料らんやこの島に於而父の舊友に逢  
はんとは依て尚近く寄らしめ色々物語せり扱此島に医師幾人ありや  
と問ふニ三人ありと答ふ家数幾何ありやと問ふに大島に  
大島と稱するハ江島之小なるに  
對するの辭なるへし大島ハ則蝦  
蟇島にして江島ハ則蝦蟇島なり  
七百餘軒江島に六十軒辻合して八百軒辻あり  
扱その三人と申ゆハ大島ニ在て江島ニハ医なし江島ハ伯耆弓濱に近  
く且海淺くして風波之患なく大島との間ハ海深く時ありて風波渡る  
へからざる事ありこゝを以て諸事弓濱を仰く医も亦然り故ニ大島ノ  
医江島に赴く事まつハなきなり扱大島のみにも一ト通りにてハ三  
人之医ニテハ不足なる様なれともこれにて十分なり此島之人ハ米を  
食する事すくなく琉球芋を以て常食とし美食する事なく諸事樸素に  
して病ある事も亦稀なり城下之人とハ大ニ異なりと答ふ

一夕七半時頃地震須暫くあり大ニ震須内に居りかたく本堂之前なる中庭ニ出居たり本堂動き樹木の左右に動く趣如何にも恐るへ支もの也<sup>マツ</sup>爾し大なる損所もなしそれを少しづつ間合ありてハ震ひ出せり然處平遠亭ハ石牆を積みあげたる上ニありて地震には些ト懸念の場所なるを以本堂の傍なる一ト間ニ轉居須時ニ中庄屋小庄屋其外之者見舞として来ル

七日晴今日も暖過常

一今日も時々地震須臾追々承るに大根島ハ元來岩にていつも地震輕き由尤新田ある所坏ハ地われて水を吹出せし所あり楳屋意字杯ヒにハ大分損しあり弓濱も損所ある由松江邊の模様ハいまた知れ須

一午後試験を始め萬々如例何も済たるハ八時頃なり詩歌之題を命須る事能儀ニ同し

一八過頃ハ松にて波入浦を發し七過頃島根郡本庄ニ着須

波入ハ本庄江五十丁計傳波松にて實五貫九百文也但二子村ハ北之にて二子ハなれ

ハ一里計也又安来ハ島ニ赴くには波入浦ニ入るを便と須

一着船之節中庄屋木村常藏目代某當所番人小瀧理右衛門等迎ニ出るそれハ富田屋徳三郎方江着ス

一本庄にて始而松江地震之趣を承りしに少々ツ、の損所ハあれとも大なる事なく勿論死傷等無之由先々安心せりママ爾し西郡ハ餘程之損所にて死傷もありし由也

(頭書)

「これハ日々少シツ、ハ必地震あり一月中休まず」

一暮合頃松江ハ飛脚到来小川氏ハ急用有之ハ間諸事拙者ニ托し置早々可致帰郷旨申来依而直ニ松を命して帰ル陸なれハ三里松なれば五里にて二里の違ハあれとも夜事之儀にも有之松之方可然との考にて四人水夫にて松を發ス尤附屬森城四郎ハ拙者之方ニ附添ハ而帰り不申松江ハ申来ハ内要用之儀左ニ抄し置

一山口島根縣孝右衛門參事十二等出仕上村藤之丞正月廿七日東京出立来ル十二日松江着之筈

一西村島根縣勘藏參事奉願免官廣嶋縣士池田徳太郎島根縣權令ニ被仰付来ル八日頃東京出立之筈

一幕六前頃六過頃震それハ度々震し曉に至て又大ニ震須

八日朝少々雨既にして晴

一五時頃本庄を發し四時頃川津村郡家に着須本庄ハ川津江二里

一大庄屋福井正三郎中庄屋三代万三郎宮廻藏七郎西学ノ大授業生宮崎齡造今日試験之上迎ニ出る既にして木村常藏も来ル又多田本一郎来ル一等學生ニ申付

本一郎ハ東京常詔之医師三瓶琳岱と申せしものにて當時川津村在宅之由

一市成村之善兵衛方江托して今晚帰る事を宿元江告く

一九ツ半時頃ハ試験を始め萬々如例詩歌題も能儀郡ニ同し相済むハ七時過なり左之通申渡ス

四書五經  
明讀

五貫文

本庄町善重  
木村

貞太郎  
十五才

右出雲郡勝部陸市同文

一等學生

本庄町医師

宮崎

立民

二等學生

別所村

月坂

右造

外ニ西学ニ而學生一人

一西学ノ教導所ハ坂本村安養寺なり南学ハ未だ開ケ須川津ニて一ヶ所南学西学合併にて開き外ニ東にて本庄或手角ニ一ヶ所西にて生馬ニ一ヶ所都合三ヶ所ニ相開き川津ノ分ヲ根本といたし来ル廿日ハ相始度ハ間教官一人差向ケ呉ハ様申出承知いたしハ旨申置  
一七半時頃松にて發ス松江ニ帰るハ暮六時頃也然レとも彼は都合之儀有之帰郷届ハ翌九日ニいた須

川津の松江道一里計ひらだ松水夫二人ツ、ニテ三貫  
一人ニ付一升五合七百五十文

## おわりに

桃文之助は、予定通り十郡を巡郷して二月八日（帰郷届は翌九日）松江に帰着した。この巡郷は廃藩置県の翌年であり、諸改革がつぎつぎと行われている時であっただけに、この間の日記の数カ所には時代の動きを思わせるものも記されている。ともあれ、明治五年四月の県学校（修道館）の開校、さらには、文部省布達第十三号（明治五年八月三日布達）の「今般被 仰出候旨モ有之教育之儀ハ今自尚又厚ク御手入可有之候處従来府縣ニ於テ取設候學校一途ナラス加之其内不都合之義モ不少依テ一旦悉令廃止今般定メラレタル學制ニ隨ヒ其主意ヲ汲ミ更ニ學校設立可致候事<sup>(5)</sup>」の布達は、明治初年以來、郷校教育の促進において、その中心的役割を担ってきた桃文之助にとって、郷校および教導所がやっと軌道にのってきたところであっただけにその心情がどんなであったかは推測に難くない。巡郷の十郡は、明治六年三月の学区画定において、島根、意宇、秋鹿の三郡を第十八中学区として二七九小学区に分ち、能儀、大原、仁多、飯石の四郡を第十九中学区として一九〇小学区に分ち、神門、出雲、楯縫の三郡を第二十中学区として一七四小学区に分ち、それぞれ小学校設立が計画されたが、この時、近代学校への橋渡しをする任務をもった郷校および教導所の存在意義は大きいものがあつたといえよう。しかし、近代学校設立状況に関する研究では、これまでどちらかといえば、郷校あるいは教導所の実証

的調査・研究の面がきわめて少ない。郷校あるいは教導所の実証的調査研究は、前近代的な幕末維新期の学校が学制公布とともに近代学校へ推移していく中で、どのように連続あるいは非連続していったかを知る上でも不可欠のものといわねばならない。その意味で、今後この方面での実証的調査・研究の進展を期したい。

最後に、本史料は松江藩儒桃家の後裔で、今は亡き桃裕行先生（元・東京大学名誉教授）のご生前の折、先生のご厚意により筆者が写真複写したものである。あらためて先生の御霊に深く感謝申し上げる次第です。また、本史料の解説にあたっては、松澤和彦氏よりいろいろとご教示を賜った。あわせてここに厚く感謝申し上げる次第です。

## 註

(1) 「儒学校日記」明治二年三月二十六日の条に「一助教河合謹蔵訓導山本談蔵園山勇永田穂積を左之通議事院江及建言 一郷町讀書之人民政局ニ而御取調儒学校江出勤諸世話為致人物學業等を試ハ上夫々御使口ニ相成度事但村塾教授等も出府致ハ上被命度事」とある。これは、村塾教授を藩校において養成し、これを郷村に配置し庶民教育機関の統制管理を強化しようとしたものである。

(2) 「公私要記十四」明治四年三月二十九日の条

(3) 藩校の「學則」（明治四年五月四日學則改定）と合わせて制定された「教導所學則」（明治四年五月四日制定）は、前文に続いて學則十カ条と學則表が定められている。（島根県近代教育史編さん事務局編「島根県近代教育史 第三卷資料」十一頁十二頁）それによれば、教導所とは従来からある寺子屋や私塾に統一的な學則を授け、その施設のない地域には學則に従

った教場を設け、これら全てを教導所と名付けたものである。

- (4) 文部省編「日本教育史資料二」四六五頁、臨川書店、昭和四十五年九月
- (5) 教育史編纂会「明治以降教育制度発達史第一巻」三三八頁、教育資料調査会、昭和三十九年十月
- (6) 「文部省第一年報」(明治六年) 八十六頁

(本学助教授・教育学)